

井上馨侯と若松屋松尾家

矢 島 嗣 久

井上馨は天保6年、周防国吉敷郡湯田村（現山口県山口市）に生まれ、文久3年にはイギリスへ洋行した。元治元年9月、山口藩庁の帰途、湯田温泉袖解橋付近で反対派から襲撃され重傷を負った。翌年、豊後別府へ逃れて療養した。馨はのち、長州および東京で活躍し、大蔵・外務大臣を務めた。47年後に再び別府を訪れ、当時の関係者達に礼を尽くし、若松屋松尾家の二階建ての土蔵に「千辛萬苦之場」の扁額を残した。

1 井上馨侯の出生と生い立ち

井上馨は長州出身の幕末の志士、明治時代には政治家として活躍した。

馨は、天保6年（1835年）11月28日に、萩藩士・井上家の次男として生まれた。出身は、周防国吉敷郡湯田村高田（現山口市）である。馨の父は井上五郎三郎光亨、母は井上小三郎光茂の女房子である。馨は幼名を勇吉と称した。嘉永

4年（1851年）、勇吉は16歳で兄幾太郎と共に、萩にある藩校の明倫館に通学した。

安政元年（1854年）、勇吉は20歳で藩主毛利敬親の御前警備の列に加わる。翌2年正月、同藩士志道慎平の養嫡子となり、名も文之助と改めた。万延元年（1860年）、勇吉が26歳のとき藩主敬親公から小姓役を命ぜられ、聞多の名を賜った。文久2年（1862年）6月、聞多は敬親の世子定廣の小姓役となり、江戸在勤を命ぜられる。

同年12月12日、聞多は高杉晋作らと品川御殿山のイギリス公使館を襲撃した。翌年4月18日、井上聞多ら3名は藩主毛利敬親から洋行の内命（密航）を受け、京都から江戸へ向かった。同年5月、聞多は密航の罪により類を及ぼすことを恐れて、志道家と離別し、再び井上家に戻った。志道家とは一女芳子を儲けている。

同年5月、聞多（29歳）は伊藤俊輔（のち博文23歳）らと5人でイギリスへ洋行した。

聞多らのイギリス渡航直後、長州藩は下関海峡で外国船を砲撃した。

元治元年（1864年）3月中旬、イギリスにいた井上聞多と伊藤俊輔は4か国（イギリス、フランス、アメリカ、オ



いずれも若き日の井上聞多

ランダ）連合艦隊軍艦18隻を下関に派遣する計画を知り、急遽日本に帰国することにした。

同年6月10日頃、井上聞多は伊藤俊輔と2人で日本に帰着。横浜から英国軍艦に便乗して豊後姫島に渡り、漁船を利用して6月23日頃、富海（山口県防府市大字富海）に渡り、三田尻（現防府市）を經由して山口へ帰着する。

8月5日、四か国連合艦隊は下関を砲撃、砲台を占領した（馬関戦争）。

8月14日、井上、伊藤の両名は各国軍艦と前後3回の談判の末講話を結ぶことに成功した。井上はこの勲功により山口藩庁の政事堂出仕に昇進し、また伊藤も勲功を藩公に認められ、重く用いられるようになった。当時、井上は春山花輔（伊藤は花山春輔）と変称していた。

2 袖解け橋事件

馬関戦争前、幕府は禁門の変の懲罰として第一次長州征伐の兵を発した。馬関戦争の敗北を機に藩内では俗論党（幕府に降服を主張）が勢を増し、井上、高杉ら急進派（武備恭順を主張）を攻撃しはじめた。馬関とは下関のことをいう。

元治元年9月25日、井上聞多（30歳）は午後8時過ぎ山口

藩庁（政事堂）の帰途、湯田温泉近くの自宅まで約2キロの途中にある袖解橋付近で反対派の俗論党に襲撃され、重傷を負う。その夜、聞多は下僕1名を連れており、刺客は3名だった。駆けつけた兄幾太郎（五郎三郎）たちが聞多を雨戸の上に乗せて家に連れて帰った。

兄が「かわいそうだ」と言っていて、刀を抜き聞多の心臓にとどめを刺そうとした。母が聞多に覆い被さるように抱きついて「五郎三郎、待ってくれ。医者が居るのだから、たとえ無理でも傷口を縫い合わせて経過をみたい」と命乞いをした。

駆けつけた医者が13カ所の傷口、50余針を縫合し終わったのは午前2時頃であった。その結果、聞多は一命を留めることができたのであった。

聞多の手当をしたのは美濃国（現岐阜県）赤坂の浪士、所郁太郎である。所は若いときから京都で医学を学び、さらに大阪の緒方洪庵の門に入って医学や蘭学を研究していた。所は慶応元年（1865年）3月に27歳で吉敷（よしき、山口県吉敷郡）の陣中で病死している。現在、山口市湯田温泉の公園内に「所郁太郎 顕彰碑」が建てられている。後年、井上馨侯は所郁太郎の遺族に対して礼を尽くしたという。

慶応元年1月、高杉らは伊藤らの力士隊を率い下関を占拠

し藩権力を奪還した。聞多は藩公から外国人応接係を命じられる。

高杉、聞多らは下関開港を模索するが、これが攘夷論者の反発を呼び、聞多は別府に難を避け、高杉らも藩外に潜伏した。これが若松屋「千辛萬苦之場」のことのおこりである。なお、聞多は外国人応接係を罷免された。

聞多は豊後別府潜伏のときには奈良屋文七などと偽称した。『世外井上公伝』には「奈良屋文七」、その他の文書には「春花輔」と記されている。

同年5月上旬、聞多は伊藤からの迎えにより海路、幕府の第二次長州征伐を目前に緊迫する長州へ帰国する。したがって、井上聞多の別府滞在は4月中旬から5月上旬までの1か月余であったと思われる。

同年7月21日井上は伊藤俊輔と共に薩長両藩の融和をはかり、かつ軍艦購入のため長崎に赴いた。そのときは、山田新助と称していた。7月28日、井上は薩摩藩士小松帯刀に同伴して鹿児島に到着。井上は薩摩の船に乗り、8月26日長崎で小銃を積み込み、27日に三田尻に帰着する。

井上馨侯の広く世に知られている雅号は世外であって、すでに慶応年間（1860年代の後半頃）から用いていた。井

上聞多は幕末期には桂小五郎（木戸孝允）、高杉晋作らとともに長州倒幕派の中心人物として活躍。維新政権成立後には、財政・外交面を中心に政府の主要官職を歴任し、大正4年（1915年）、9月1日81歳で没した。井上馨は伊藤博文、山県有朋とともに明治の三元勲（老）として政界に君臨したのである。

3 若松屋松尾家

若松屋とは、一説によればもと兵庫県加古川地方の領主で、江戸中期のころにお家断絶、長男が豊後別府に逃れ、弟が加古川に潜伏したという。弟の子孫は加古川で大きな鉄工所を経営する。兄の子孫は、別府で旅館と回漕問屋となった。

別府へ落ち延びるとき、かなりの家来をつれてきたと思われる。若松屋の松尾家に刀箆筭があって長刀、脇差などがぎっしりつめられていたと伝えられている。なお、別府の松尾家の墓地内には先祖の墓を取り巻くように小さな他姓の墓がたくさん存在している。刀類は支那事変の際になくなった。たんすは知人にやってしまったという。

井上聞多が潜伏した若松屋松尾家の長女キヌの婿、和田家本家の和田彦蔵は弘化3年（1846年）生まれ、昭和10年

に90歳の高齢で死去した。八幡朝見神社の氏子総代として大正11年秋に完成した社殿の改築、昭和2年5月の齋殿、能楽殿の新築という大工事の先頭に立った。1万人をこえる氏子の力を一つに集め得た成果である。

和田彦蔵の二男池辺守松は明治9年（1876年）生まれ、別府青果社長を務めた。また、守松も父彦蔵の意志を継いで、八幡朝見神社の氏子総代をしていた。当時、若松屋旅館は楠銀天街と銀座街が流川通りで出合う地点にあり、流川通り2丁目の四つ角から銀座街側に21間（約38メートル）もの奥行きを持った大きな旅館だった。

明治末期の頃、まだ流川通りの道幅が狭く、南の向かい側の網元若木屋との間は2間程度だった。道路拡張で若松屋側は4間も道にとられた。その後、銀座街が駅前通りに抜けたとき、この銀座街通りはちょうど若松屋の門から玄関をぶち抜いて造られたといわれる。広かった屋敷も流川通りの拡張と銀座街の出現で大きく削られ、二分されてしまった。

別府の市区改正とは、明治39年（1906年）に別府・浜脇両町が合併した際、町長日名子太郎が同39年から市街区改正案を計画し42年1月に着工、同43年7月に退任したために、事業は、後任の町長吉田嘉一郎によって継続され、大正元年

(1912年) 8月に完了する。直ちに鉄道線路以西の整理にも取りかかり、同5年以降、昭和3年(1928年)まで、13年間かけてほぼ旧別府市全域の街区整理が完工したのであった。

松尾家は、その後太平洋戦争に入ると、家族が住んでいた門の右側の二階家は強制疎開でこわされた。この二階家は同家の棟の中でも一番古く、嘉永年間のころの建築といわれていた。そのあとに戦後、銀座街と流川の北東側の角に「一茶」が土地を借りて菓子と喫茶を開店した。若松屋の幕末物語は強制疎開でこわされたこの二階と棟続きの離れの二階家が主な客室であったときのことである。

4 千辛萬苦之場

慶応元年(1865年)2月中旬の夕方、下関から井上聞多を乗せた船が別府に着いた。聞多は当時31歳。奈良屋文七(又は春山花輔)と変名し、お静という下関の芸妓も同行していた。土方の親分姿に変装して、今の流川通り旅館若彦(のちの若松屋)へ入った。若松屋の主人は彦七(松尾姓)であった。彦七は文政6年(1823年)生まれで当時43歳、回漕問屋もやっていた。

灘亀は、井上が春山花助(輔)と名乗って子分になった頃は、30歳の時。灘亀は豊前長洲の漁師の出で、本名は亀吉とあった。井上は桶湯で盗難に会い、一文無しとなる。そのため、お静を下関に帰して伊藤に金策を頼んだ。

若松屋彦七が井上に、土方人足の元締め灘亀を紹介して、井上は灘亀の子分となった。やがて下関の伊藤から井上へ50両の金が届く。しかし、灘亀の子分からそのかさされて、まともや賭博で一文無しとなる。当時、聞多が桶湯で知り合った豊後臼杵藩の武士が湯治廻りとして妻子と3人で鉄輪行きを予定していた。距離はおよそ1里半。聞多は、武士と妻子の3人分の荷物運びを手伝わせられる。荷物の重さはおよそ14〜15貫(52・5〜56・25kg)であった。聞多は天秤棒を用いたが、慣れないため肩が腫れ上がった。目的地の鉄輪に到着後、武士からお礼として1朱を受け取る。1両は4分、1分は4朱、1朱は625文。この頃の1両は米150kg、1石(こく)に相当する。維新後、1両は1円に代わる。

慶応元年5月12日、幕府が第2次長州征伐を計画。今回は將軍家徳川家茂の御親征。先述の聞多が伊藤の迎えにより長州に帰ったのはこの時である。その後、井上は奇兵隊の山口

鴻城軍総督になる。

坂本龍馬の周旋で慶応2年（1866年）1月21日、薩長連合が成立、7月將軍家茂が没して長州征伐は失敗に終り、幕府は一途滅亡へと向う。

5 その後の井上侯の活躍

井上聞多は維新後、参与兼外国事務掛（係）として政府入りする。明治2年（1869年）通商司知事、同4年には大藏大輔に就任。岩倉使節団の渡欧中に財政問題から辞職し、貿易会社先収会社（三井物産会社の前身の一つ）をおこした。

鹿鳴館について。この名称は、詩経（中国最古の詩集）の「小雅・鹿鳴」に基づく。明治初期の官設社交場。東京市麹町区内山下町（現東京都千代田区内幸町1丁目）に明治16年イギリス人コンドルの設計で完成。井上馨が外務卿となり、不平等条約の改正をはかった欧化政策の一環であり、外国貴賓の接待と上流社会の社交を目的とした園遊会・舞踏会を開催して「鹿鳴館時代」を現出させ、庶民の批判を浴びた。のち、家族会館となる。昭和20年焼失。

明治8年（1875年）、井上は大阪会議を契機に元老院議員として政府に復帰。同年江華島事件の特命副全権弁理大

臣、明治11年に参議兼工部卿、同17年の甲申政変後の特派全権大使などを歴任しながら、日本鉄道、日本郵船の設立や農経営論を展開するなど殖産興業に尽力した。

同18年、内閣制度樹立後の12月、井上は第一次伊藤内閣の外務大臣、同21年4月には黒田清隆内閣の農商務大臣、同25年8月には第二次伊藤内閣の内務大臣と総理臨時代理、同31年（1898年）1月には第三次伊藤内閣の大藏大臣などに就任した。晩年は天皇を補佐する元老をつとめ、侯爵に列せられた。

6 井上侯の別府再訪

明治44年（1911年）5月下旬、別府町に福岡県飯塚の貝島太助方から急使が立ち、井上馨侯爵の来別を予告してきた。5月中旬、井上馨は東京を出発、大阪から中国路を経て5月21日に九州に入った。22日に三池炭坑を視察、三井倶楽部の晩餐会の席上で、今までの別府での経過を語った。27日には、戸畑鑄物会社を視察した。

井上侯再訪の事前調査は、最初、貝島太助が頼まれたが、同氏は麻生太吉と相談の上、貝島の店員高山篤太郎という人を別府に行かせて調査させた。麻生太吉は、当時別府田の湯

に別荘五六庵（現別府中央公民館用地）を所有していた。5月29日午前10時47分、行橋発の列車で雨の中を別府に向かった。柳ヶ浦駅で千葉大分県知事が出迎え、同車して日出で線路工事建設用の列車に乗り換え、日出駅で麻生太吉、吉田別府町長、日名子助役、高橋助役、藤田商船別府支店員、和田彦蔵、松尾亀四郎、松尾数馬^{かずま}たちが出迎えた。

明治23年、伊藤博文侯爵が来別して調査の結果を井上侯に伝えていた。その後、日清戦争や日露戦争があり、また井上侯の病気等のため来別が遅れていたのであった。

日清戦争 明治27年（1894年）～明治28年（1895年）

日露戦争 明治37年（1904年）～明治38年（1905年）

明治44年5月29日午後3時すぎ、井上馨侯は麻生別邸（五六庵）に入り、ただちに彦七の長女和田キヌ（64歳 当時18歳）、次女佐藤ハツ（58歳 同12歳）、その他嫡孫亀四郎らも別邸に招き、貝島太助・同太市・柏木勘八郎・同次郎熊らも同行した。5月30日午後1時、井上侯は麻生別邸を出て若松屋に到る。午後6時、侯の案内で、宴が不老泉の三階で催された。

井上侯は若松屋で湯治をした土蔵の二階で若松屋松尾家の関係者一同と記念写真に写り、「千辛萬苦之場」と揮毫^{きごう}して、それを松尾家に贈った。なお、その後若松屋の関係者一同を東京見物に二週間ほど招待した後、多数の土産を持たせて別府へ帰した。



千辛萬苦之場（中央公民館北側）



「千辛萬苦之場」の額のある部屋で撮影した写真（向って左から）

松尾マサ 二代目亀四郎およびサダの娘、三代目の姉、33歳、

夫は松尾数馬。 恩人若彦の孫。

松尾八重 4歳、松尾数馬および三代目の姉マサの娘。 恩人

若彦の曾孫。

松尾サダ 初代松尾彦七の長男、先代（二代目亀四郎）の未

亡人、56歳、三代目およびマサの母。

井上馨侯爵 当時77歳。

佐藤ハツ 初代松尾彦七の次女、当時12歳。 井上侯に食事を

運び、父の命令で小遣いとして毎日天保銭1枚を

井上侯に渡していた。 58歳。 未亡人、夫佐藤義雄

（巡査）は豊前小倉の人。

和田彦蔵 初代松尾彦七の長女キヌの夫、町会議員。

松尾彦四郎 三代目、「二代目亀四郎」、「若亀」と称した。

三代目から「若松屋」に改称した。 サダの長男、

井上侯のすすめで「彦七」に改名する。

松尾数馬 三代目彦四郎の姉マサの夫。 マサは二代目（初代

亀四郎）、およびサダの長女。

和田キヌ 初代松尾彦七の長女、ハツの姉、当時18歳。 和田

彦蔵夫人、当時すでに結婚していた。 64歳。

その他の関係者

若松屋 初代松尾彦七は明治12年（1879年）10月17日、

56歳で死去している。通称若彦。

初代松尾彦七の妻、松尾フジは、明治6年（1873年）9

月26日、47歳で死去。

松尾彦六 松尾彦七の妻フジの連れ子、別家して若松屋で営

業。通称「若彦」と称している。

佐藤義之 ハツの実子、27歳、なまがた鯰田炭坑に機械係として勤務

していた。井上侯は目島氏に「鯰田炭坑から引き

取って目島氏の炭坑で使ってくれ」と頼み、「ハ

ツと義之の母子が一緒に暮らせるよう」に頼んだ。

永井亀吉、通称灘亀は明治の御代となり、町人百姓も姓が無

くてはならぬようになったので、永井を姓として

永井亀吉と呼んでいた。灘亀は後年失明し、明治

35年8月3日、享年67歳で死去している。井上侯

は別府再訪時に恩人灘亀の墓を建てた。場所は別

府市芝尾の市宮墓地、浜脇中学校の西南側である。

初代松尾彦七の次男、亀四郎の代から「若亀」と改称した。

ほどなく死去する。

初代彦七の孫初代若亀の子で現戸主は亀四郎。「若亀」と称

している。

7 その後の若松屋松尾家

若松屋彦七は明治12年（1879年）8月、一説には10月

17日、56歳で死去。妻のフジは明治6年（1873年）9月

26日、47歳で死去した。台座に「若松屋 彦七」と記された

彦七、フジ共通の墓石が海門寺の墓地にあったが、現在は野

口の墓地に改葬されている。

恩人若彦（松尾彦七）は別府築港に関して是最も尽力した

人である。国札5万両の利子で築港を計画したが、結局3千

両の損失を招き、彦七はその内千両を自分の手で償却してい

る。また、窮民のため匿名で50両の義捐金ぎえんを上書箱に投じた。

のち別府村彦七であることが判明し、知事から表彰されてい

る。また、別府朝見八幡社や浜脇の崇福寺そうふく（上ん寺）などに

も寄進する奇特家であった。

永井亀吉は明治35年（1902年）8月3日、67歳で死去

した。

松尾ツタは二代目松尾亀四郎の妻、井上馨侯の別府再訪時

は嫁入りしたばかり。柳ヶ浦の医者いしやの末っ子から大世帯の若

松屋に嫁入りしたツタは明治25年（1892年）生まれ、昭

和19年（1944年）頃、主人の二代目彦七を失い、戦後の荒波を女手一つでやってきた。旅館はやめて長男彰三（早大出身）が松尾ビルと松尾洋装店、二男雅司は九州歯科大を出て竹瓦で歯科医を開業していた。

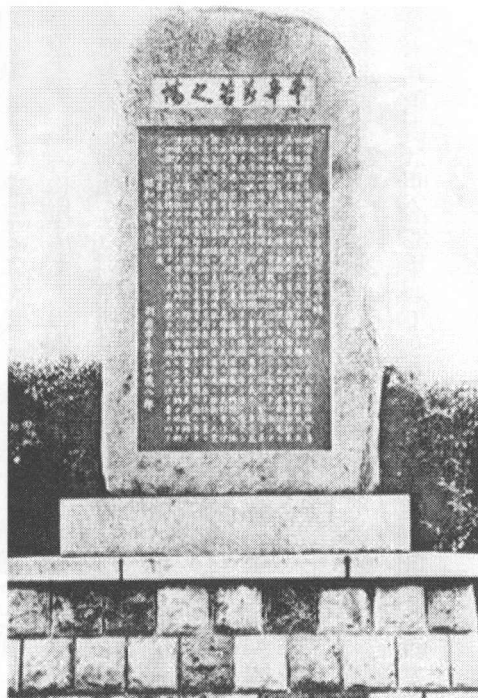
昭和30年代後半の住宅地図によれば、流川と楠銀座街の東側の角に「菓子喫茶、一茶」（既述）があり、さらに北側へ5軒目に「松尾洋品店」があった。松尾洋品店の裏手、東側に「松尾ビル」がある。なお、竹瓦通りの南西側に「松尾歯科医院」があった。

昭和8年（1933年）6月、市区改正のため松尾家は別府市に「千辛萬苦之場」の建物および当該扁額や記念写真等を寄贈し、別府市公会堂（現市中央公民館）敷地に移転された。同年6月、当時の別府市長、平山茂八郎によって「千辛萬苦之場移転の記」の石碑が別府市公会堂敷地内に建設された。

「千辛萬苦之場」の建物等は別府市が永久保存することになった。「移転の記」の石碑の文字は矢野嶺雄の揮毫になるもので、嶺雄は別府市南荘園町の自宅に「石垣原古戦場公園」を自費で建設した。孫にあたる矢野昌弘氏が現在、別府市鶴見町で老人福祉施設「はるかぜ」を運営されている。

8 その後の伊藤、井上、高杉たち

高杉晋作は奇兵隊を創設して活躍したが、慶応3年（1867年）4月14日、肺結核のため下関で死去する。享年29歳。



千辛萬苦之場移転の記の石碑

伊藤博文（俊輔）は明治18年（1885年）から同34年まで、第四次にわたる内閣を組織して活躍した。

伊藤博文は明治42年、韓国統監府の初代統監を辞任し、同年10月、日露関係を調整するためロシアの蔵相コブツォフと会談するため渡満（現中国東北地区）、10月26日ハルビンに到着した際、駅頭で韓国の独立運動家安重根に暗殺された。享年68歳。ハルピンは現在、黒竜江省南西部にある同省の省

都である。

なお、馨は同33年からは三井家終身顧問としても活躍した。井上馨は明治40年9月、功により侯爵を授けられ、大正4年(1915年)9月4日、興津おきつの別邸で病死する。享年81歳。大正元年(1912年)12月、山口市湯田に建設していた井上馨侯の銅像除幕式が行われた。

昭和2年(1927年)3月、井上馨侯の養嫡子井上勝之助公爵が病氣保養のため来別し、別府駅前通り海門寺にあった森祐三郎の別荘に滞在中、灘亀の墓地に玉垣を造った。勝之助は馨の兄光遠みつとむ(幾太郎、五郎三郎)の次男である。森祐三郎は勝之助の弟(光遠の三男)にあたり、森清蔵の養嫡子となった。ちなみに森清蔵夫人は井上馨侯の末の妹にあたる。

『世外井上公伝』(内外書籍株式会社 昭和8年11月)

『別府潜伏時代及其前後の井上侯』(別府市役所 昭和8年)

『別府今昔』(大分合同新聞社 昭和41年)

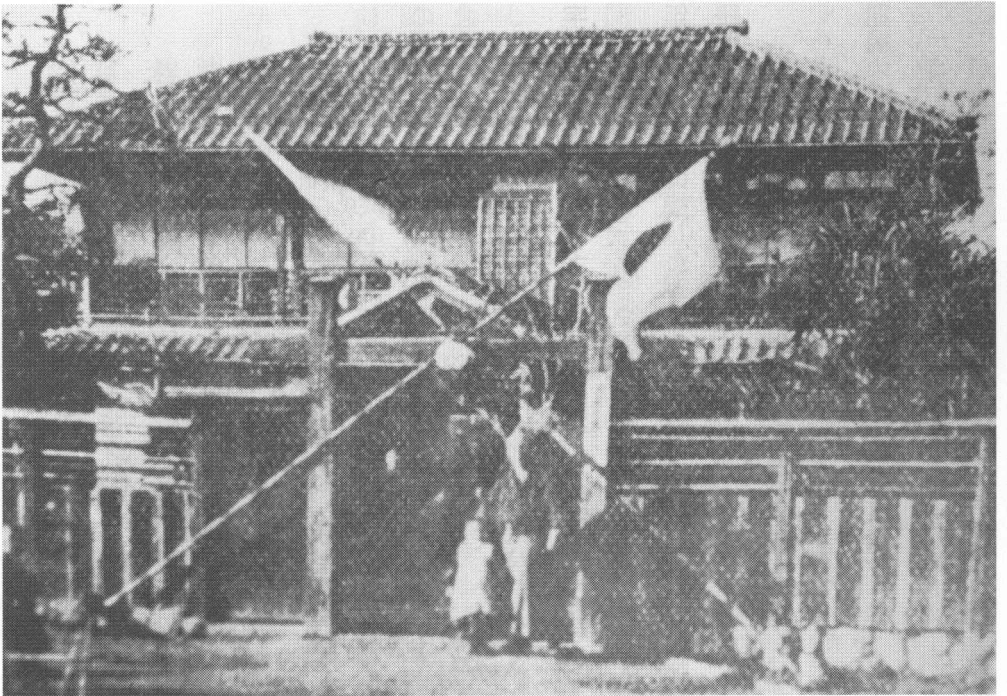
『別府史談』第7号(1993年)

『別府市誌』(別府市教育会市制10周年記念 昭和8年)

『別府市誌』(別府市 市制50周年記念 昭和48年)

『別府市誌』(別府市 市制60周年記念 昭和60年)

『別府市誌』(別府市 市制80周年記念 平成16年)



創業当時の亀の井旅館

別府市郷土文化史研究会
「目で見える別府百年」より